

みそがわ

味噌川ダムと木曽川源流の村

新連載
第1回

水を育む大自然と木祖村の歴史

NPO法人 木曽川・水の始発駅 岩原 大輔

(1)山川一体と、味噌川ダムへの期待

①味噌川ダムと村の人びと

「味噌川ダム」は昭和55年2月の建設事業開始より、平成8年8月28日の竣工まで、16年の歳月を要しました。そして平成5年12月の試験湛水開始以来869日目で満水となりました。ダム湖の水は鉢盛山はちもりやまに源を発して、20数本の沢の水を集め、およそ8キロ流れ下ってダム湖の「奥木曽湖」おくぎそこに流れ込みます。この間の標高差は約800メートルあって、河川としては激流で、特に源流付近は清冽な水がほとぼしっています。

源流のワサビ沢には「木曽川源流」の標柱が建っていて、側面には「母なる川ここに生まるる」と記されています。

昭和時代の後半、味噌川ダム建設の話が持ち上がってくると、村や村民は村の活性化を目指して住民による「村の将来を考える会」が開かれるなど、活動も活発になってきました。呼応するように、国道19号に鳥居トンネルが開通し、国鉄中央西線の複線化が進み、「親はボロを着ても子どもには立派なものを」という木祖村長などの考えで、小中学校の新校舎も落成しました。文化面でも文化財調査委員によって調査研究が進められた『木曽の鳥居峠』『木曽のお六櫛』が発刊されました。次いで、『木祖村の文化財めぐり』『木祖村の石造文化財』も相次いで発刊され、これらは、村民が村を再発見する格好の手引書となりました。また平成5年には味噌川ダムの試験湛水開始に合わせるようにして『木祖村誌』全4巻の刊行事業も始まり、平成13年に完結しました。



源流の碑



源流の流れ

②味噌川の風景

木祖小学校の校歌の冒頭で「茂る木山のあいだよりわきて流るる木曾川や …」と歌われています。その木曾川は源流から河口までおよそ229キロ。小木曾おぎその入口で笹川ささがわが合流しますが、本流はむかしから味噌川として親しまれてきました。味噌川の語源は、いつのころからか「味噌」の文字が当てられています。『未だ曾ならず』で、まだ木曾川ではない」という意味であるといわれています。

ダムができる前の味噌川の谷は深く、東の山々からは箕輪沢みのわ、羽黒沢はぐろ、尾骨沢おこつ、池ノ沢おと、尾頭沢などの谷川が、西からは中ノ沢、笹尾沢ささお、センミ沢などが、それぞれ生まれたばかりの新鮮な水を本流の味噌川に流し込んでいます。木祖村誌編纂の折りにこれらの沢を調査したとき、名がついた沢だけで大小85本を数えました。

昭和2年、味噌川の山々で伐られた木材を運送するために、現在の木祖村役場庁舎の付近にあった貯木場から鉢盛山の麓まで15.5キロ、本流に沿って森林鉄道が敷設されました。以後、昭和40年に林道に切り替えられトラック輸送になりましたが、それまでは森林鉄道が活躍していました。「林鉄」とか「軽便」といって、村民にも親しまれていました。

森林地帯に行く周辺の風景は美しく、とくにダム湖上流のタカ回り付近の新緑は目が覚めるようで、「千古不易」の森林地帯といってもいいほどでした。

③ダムあつての安全・安心

「水環境保全」の時代といわれる中で、木祖村がある木曾谷きそだに（木曾川上流域の狭長な谷）は大きな災害に見舞われてきました。昭和34年9月の伊勢湾台風は水害のみならず、木曾の山々に育っていた貴重な木曾ヒノキも大量になぎ倒してしまいました。戦後から30



味噌川ダム(満開のツツジの柳沢尾根公園から)



ダム湖でせき止めた流木(平成18年7月)

年代は大水害頻発時代とも言われましたが、木曾谷は40年代から50年代に入っても大きな災害が続きました。58年9月は台風10号による豪雨災害で木祖村にも大きな災害をもたらしました。

味噌川ダムの役割は「洪水調節・利水・河川環境の保全・発電」の4つですが、平成の時代になって6年8月には下流の中部地方が大渇水となりました。そのため「味噌川ダム」は試験湛水中でしたが、下流の人々の要請に応じて緊急放流を行いました。また8年2月には冬期の渇水となり、やはり緊急放流をして下流の渇水を救ったのです。逆に18年7月、村内は稀に見る豪雨に見舞われました。15日17時の降り始めから19日23時までの総雨量は448ミリに達し、ダム湖への流入量は毎秒最大117トンになりました。国道もJRも不通になるほどの大被害で、ダム湖周辺では山崩れとともに、根こそぎにされた大量の流木がダム湖に流出したのです。ダム湖を埋め尽すほどでしたが、それらの流木はダムによってせき止められたために下流に流出することはありませんでした。もしもこれらの流木が下流に流されていたら、と思うと「背筋が寒くなる」だけでは済まされなかったと思います。災害の度に味噌川ダムへの期待は深まりますが、竣工を記念して造成された柳沢尾根公園やんざおねには、ダム建設に腐心された日野文平村長きじょう（当時）の揮毫によって「源流愛語碑」と刻まれた巨碑が建っています。

味噌川ダムは平成8年に「厳しい気象環境に恵まれない地質条件を克服した」ということで「土木学会技術賞」を受賞しました。また、周辺の自然環境も緑が成長するとともに年々美しくなり、17年にダム湖の「奥木曾湖」は「ダム湖百選」にも選定されました。

④味噌川の名を冠したミソガワソウ



ミソガワソウ(木祖村自然同好会提供)

味噌川の名を冠した、村でも唯一の植物があります。ミソガワソウです。このミソガワソウはどこで見ることができるのか、図鑑にも載っていますが「木曾味噌川に多くあるので、その名がついた」というだけで、村の中でも何処にあるのか知る人もいませんでした。村誌編纂室へも現物を持参する人がいましたが、ラショウモンカズラであったり、ジャコウソウであったりで本物ではありませんでした。そんな中、平成7年7月31日、木祖村の自然同好会のメンバーが小鉢盛山の東斜面から流れ出すヒルクボ沢の堰堤近くで昼食の折り、会員の一人が一本のミソガワソウに出会ったのです。それはおそらく「上流から流れてきたもの」と思われたので、後日、会の有志が再調査をしたところ、ヒルクボ沢の源頭付近でミソガワソウの群落を発見することができたのです。

江戸時代、木曾郡は尾張藩に属し、同藩は漢方薬を研究する本草学の先進地でした。資料が各所に残っているので、この発見は名古屋市博物館でも話題になりました。村誌編纂の植物担当者が熱心に名古屋市の博物館や図書館で資料調査を進め、名古屋市植物園の伊藤圭記念室で見た伊藤圭介の『図説植物雑纂』の中に、「三円云 水谷翁採葉ノ節木曾荻曾味噌川ニ多クアルヲ見テミソガワソウト名付ク」とあって、本草学者の水谷豊文が命名したものであることがわかったのです。「三円」とは、豊文と同時代の本草学者、神谷三園のことです。これを契機に各所で関係文書が見つかり、ミソガワソウについて詳しいことがだんだんわかってきました。元文5年(1740)に同じ本草学者の三村森軒が薬草採集のた

めに味噌川に入り、『薬草見分信州木曾山道中記』を残しており、味噌川流域は薬草の宝庫であったこともわかりました。こうしたことで、ミソガワソウは村民のいっそう身近なものになったのです。

⑤味噌川源流の水を山の向こうの村に送る話

木曾川は鉢盛山に端を発しますが、鉢盛山(2,446メートル)は、江戸時代「鉢伏山」といわれていました。明治12年(1879)になって、同名の山が美ヶ原(長野県中央部にある高原)の南東にもあるということで「鉢盛山」と改名されましたが、日本の300名山に数えられています。小鉢盛山(2,374メートル)と烏帽子岳(1,952メートル)を結ぶ稜線のほぼ真ん中であって、山頂からは御嶽山おんたけさんや乗鞍岳のりくらだけなど北アルプスの連峰を望むことができ、最近では登山者も増えています。

天保13年(1842)、鉢盛山の鞍部をくり貫いて、松本平の一角である朝日村へ水を送った歴史があります。朝日村は山が浅く樹木が少ないために、水を蓄える環境ではありませんでした。村民は農地を拓くためにも、なんとしても水がほしかったのです。この工事は6年かかって通水に成功し、農地の開発も進められましたが、災害などで数年後に消滅してしまいました。しかし、その必要性は高く、明治5年になって再開されました。そして3年後に完成し、明治26年まで利用されました。木曾山の水が鉢盛峠を越えた向こうの村でも使われていたという貴重な史実であり、今もその水路跡の一部を見ることができます。

(2)味噌川源流と対峙する水木沢天然林



水木沢天然林を散策する子どもたち

一方、小木曾の入口で木曾川本流と合流する笹川ですが、上流部は花崗岩地帯であり、風化して崩落しやすい場所が各所で見られます。そのことを意味する古図が残っていて、それらを見ると、押出沢をはじめ崩落、ジャジキ沢、大ナギ沢など流失や崩落を意味する地名が沢の名として記されています。笹川の源頭は枯尾沢ですが、東西 51 本の大小の沢から豊かな水が集まり、木曾川本流に流れ込んでいます。

その沢の一つが水木沢で、ブナ、ミズナラ、ヒノキなどの天然林地帯で美しい水が流れ、平成 20 年 6 月には「平成の名水百選」に選定されました。水木沢の森は、戦後になって当時の営林署から伐採計画が持ち上がりましたが、地元の古老から「水木沢の木を伐ると荒れるぞ」という話が伝えられ、そのために残ったという逸話があります。

水木沢天然林は、平成 3 年 1 月、木祖村が当時の長野営林局と保存協定を結び、「水木沢郷土の森」として 82 ヘクタールを保護林として保護保全につとめることを約束して、平成 4 年度から村が管理棟、遊歩道などを整備し、平成 7 年 5 月 26 日に「水木沢天然林」として一般に開放されました。

林内には「原始の森」「太古の森」「源頭の森」と名づけた 3 つの散策コースがあって、前 2 者は 1 時間程度、後者の源頭の森コースは約 3～4 時間で一巡できます。

源頭の森コースは平成 25 年 5 月に開設された新しいコースですが、文字通り水木沢の源頭を訪ねるもので、管理棟から源頭までの標高差は約 330 メートルです。いずれのコースでも樹齢およそ 300 年という木曾ヒノキ、サワラ、ネズコの針葉樹と、ブナ、ミズナラ、トチノキなど広葉樹との混交林で、専門家からも「理想的な森」とか「森づくりのお手本」などといわれています。そして、春から夏は足元の植物観察もよく、年間通しておよそ 30 種類の野鳥が観察できる森でもあります。

(3)木曾川源流の里、木祖村の生い立ち

江戸時代、村のシンボルである「中山」を囲むようにして、藪原村、萩曾村、菅村がありました。この 3 村が現在の木祖村です。

藪原は古くから「お六櫛」の産地として知られ、鳥居峠を控えた宿場町として旅人で賑わったところで

す。萩曾、菅は農山村地帯で農業や林業を生業としていました。天保 9 年（1838）の人口はそれぞれ、藪原 1517、萩曾 1240、菅 454 で、宿場を抱えた藪原村が三村の中心的存在でした。

それが明治維新の改革によって、明治 7 年に三村が合併して木祖村となったわけですが、明治 17 年になって地理的事情などで再び三村に分離しました。しかし分離はしたものの、明治 21 年 4 月に国の「市制・町村制施行」に伴って町村合併が推進され、22 年 5 月 17 日に再び合併して新生「木祖村」が誕生したわけです。

この間、村に残る古文書に、合併については「…眼前ノ小異ヲ棄テ永遠ノ大計ヲ定ム 公益ヲ先ニシテ私利ヲ後ニスベキ…」と述べられており、村名については、木曾川源流の村であり、木曾の「祖」であることを自負して「木祖村」としたことが古老によって伝えられています。

この時の文書が吉田に残っていて、それには「…眼前ノ小異ヲ棄テ永遠ノ大計ヲ定ム 公益ヲ先ニシテ私利ヲ後ニスベキ…」と述べられています。

文字通り、小異を棄て大道に立ったものであり、村長・議員も決まり、木曾川源流の村として、また木曾の「祖」を自負し、村民一体となって「木祖村」を築いていこうというわけで、新生「木祖村」そして、「源流の里木祖村」として今日に至っているわけです。



木祖村全景

参考文献

- 『木祖村誌・源流の村の自然』 木祖村誌編纂委員会 1997 年
- 『木祖村誌・源流の村の歴史（上）』 木祖村誌編纂委員会 2001 年
- 『木祖村誌・源流の村の歴史（下）』 木祖村誌編纂委員会 2000 年